



笑顔は、ええ顔!!

出あい、ふれ愛、わきあいあい!!

落語家 桂文福さん

まさか、どもりのある自分が落語家になるなんて思ってもいませんでした。集団就職で和歌山から大阪に来て、そのときに大阪に来たのだからということで落語を見に行きました。見ているうちに、だんだん自分も人前で落語がしたいという気持ちになってきて、夢中で五代目桂文枝師匠にお願いに行きました。なんとか入門しましたが、まわりとまったくレベルがちがう。大学の落語研究会出身や、クラスの人気者のような人たちばかりでした。自分は一前緊張してしまうし、なまりはあるわ、どもりはあるわ。ところが師匠は僕の話し方をバカにせず、「おまえには独特の間があるんや」と言ってくれました。吃音の人は、歌うと言葉がスムーズになります。落語家なら、歌なんか歌わずにちゃんと落語をしろという人もいますが、うちの師匠は僕が河内音頭や相撲甚句をすることをおもしろがってくれました。

自分が苦手だと思っていたところを「よさ」として認めてくれる人がいたからこそ、吃音があっても味のある落語家になれたと思っています。

*

吃音は治したいし、スムーズにしゃべりたいのはやまやまですが、べらべらしゃべっている政治家の演説を聞いても心が通じない人はいます。吃音のある人は、とつとつとしゃべりながらも、ひと言ひと言一所懸命伝えようとします。言葉は心に通じるものです。相手がいるから緊張もします。人には心があるからこそ吃音があるのだと思っています。

でも、吃音だからといってしゃべるのを避けるのではなく、コミュニケーションしたいから工夫しています。カレー

ライス注文するとき、焦ってしまうと「カカ…カレーライスください」となってしまいます。それを、音の出やすい「ライスカレー」に変える。名前を呼ぶときは、緊張してしまうので「た、た、た、田中さん」となる。その場合は、「いつも元気な田中さん」。それだとスムーズに音が出ますし、その人の特徴もわかります。

「前の防衛大臣は福井出身と聞いたけど、北海道の釧路じゃないかいな～。やっぱりしつげん多かった～♪」とか相撲甚句で唄って、芸人9条の会に参加し、歌って笑って平和や政治問題を訴えています。笑いの世界でも、人をばかにして嘲笑したり差別をしたりといったことがよくありますが、一人でもいやな思いをしていたらほんまの笑いではありません。みんな同じ思いで笑わないといけません。「寄席」という語源は、みんながなかよく寄せ集まろうということなんです。老若男女、犬や猫でも庭の木の葉でもいい。笑顔、笑顔、ええ顔。たとえ言葉が通じなくても、にこっと笑って心が通じ合うと気分がいいのです。

かつら ぶんぶく / 1953年、和歌山県生まれ。1972年に三代目桂小文枝（後の五代目文枝）に入門。現在、上方落語協会理事。「ふるさと寄席文福一座」の座長として全国を巡演中。大相撲評論家として新聞、相撲誌等でおなじみ。「真の笑いは平等な心から」のテーマで人権講演も好評。